

こころの五手箱

林原社長
林原 健



日経新聞(夕刊)
2010年2月1日～
2月5日

見ればはっと息をのむほどに真つすべな刀身。ざらりと濡れたように光る刃には北斗七星の意匠が施してある。「七星剣」。聖徳太子の佩刀である。

もちろん聖徳太子本人が身につけていたものではない。懸念している刀匠の大野義光氏が復元したものだ。製法の記録は残っていない。

見ればはっと息をのむほどに真つすべな刀身。ざらりと濡れたように光る刃には北斗七星の意匠が施してある。「七星剣」。聖徳太子の佩刀である。

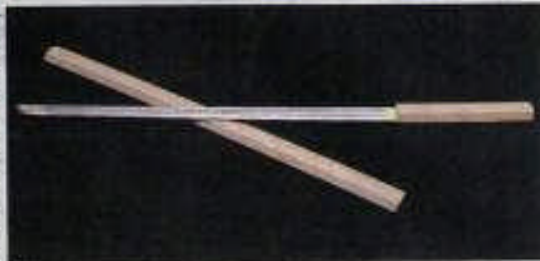
大阪市の四天王寺に伝わる古い七星剣を元に、大野氏が試行錯誤しながら苦心して作りあげた。複製とはいえず、現代の一流の刀匠が技術の裏りを尽くして再現した作品である。

名刀を数多く所蔵する林原美術館(岡山市)を運営しているくらいだから、もともと刀剣に興味があったのかと聞かれるが、そんなことはない。無類の刀好きだ。父の父の方で、亡くなった後は取集品の山が残り、これをどうしたらいいかと途方に暮れたのが私と刀との出会いである。

父の遺志を継ぎ、美術館を通じて古い刀の収集を続けたが、私の関心はむしろ新しい刀を作ることに向か

聖徳太子の佩刀「七星剣」

希代の名品、時超えた物思い誘う



大野義光氏が復元した「七星剣」

はやしばら・けん 1942年岡山市生まれ。慶大在学中の61年に林原社長に就任。研究開発型企業を志向し天然の硝子、トレハロースの生産化に成功。林原美術館の運営や輸入品研究など文化・学術活動にも力を入れている。

変わった。伝統工芸を伝承する技術の粋をプラスしていくとは、単に古い技術を墨守することが大切なのではないか。やがてそう考えるようになったからだ。

大野氏に依頼して作ってもらった刀はかれこれ40、50本にのぼる。技術を後代に受け継ぐためには、単に記録に残るといっただけでなく、実物が存在していることの意味は大きい。将来のために貴重な文化財産を残したいという使命感もあるが、それだけではない。こころしたモノと向き合うことは、社会や人間のありようについて考えるきっかけになる。軸を払った七星剣をじっくり見つめると、聖徳太子という人物の姿が頭に思い浮かんでくる。当時の大帝国、隋に対して一歩も引かず渡り合った男。かつての日本人はいかに誇り高く、気概を持って生きていたことか。そんな時を超えた物思いにふと誘われるのも、職人が全身全霊を傾けて作った「本物」であるがゆえであらう。

思い入れ深い七星剣だが、近いうちに林原美術館に取め、できるだけ多くの人の目にしていたらいいと考えている。職人が命を吹き込んだ作品には誰が見ても心に強く響いてくるものがあるはずだ。自分一人の五手箱にしまっておいてはもったいないだろう。

こころの玉手箱

林原社長

林原 健

大元神社の武道場



今は子供たちの稽古場に

学生時代の空手は、どうすれば試合で相手に見えるかと、そんなことをばかり考えていた。だが岡山で近所の組んだのは、真の強さを追求するのよ。一撃として相手を倒すとはど

東京で通った道場、大やめました。と正直に話す。そのころは空手に傾けられた。嫌ななりたいたと始めたが、決して稽古が好きだったわけではない。だから大学在学中に父が急死し、会社を継ぐため岡山に戻った。そこには、これぞ空手と縁が切れると安堵したものだ。林原の社長に就いては、らくしてのよ。大学時代の空手の師である藤功先生が岡山を訪ねてこられた。一種古きよん心と結び、一撃がなないのである。小嶋先生に岡山に来ていた。だが、稽古をつけてもらうことにした。学生時代の空手は、どうすれば試合で相手に見えるかと、そんなことをばかり考えていた。だが岡山で近所の組んだのは、真の強さを追求するのよ。一撃として相手を倒すとはど

真の強さを追求、脳みそも大汗

空手で大切なことは強さを鍛錬する心を磨くことと、予想外の変化に即座に対応できる「やわらか頭」を磨くことである。これは私という人間に実に入念なものをもちたらしめてくれた。人に攻撃に接する姿勢と、先が見通しづらい中で最善の判断をしていく柔軟性が経営者にとって大切であるのはいうまでもない。大元神社の武道場は、今は子供たちの稽古場となっている。小さな空手家たちが一心に稽古をしているのを眺めながら私は思う。ここで鍛錬した日々があるから、今の自分があるのだと。そう思うと懐かしさと感謝の入り交じった思いがじんわりとわきあがってくる。

こころの玉手箱

林原社長

林原 健

井深大さん



アルバムを見ると井深さんの言葉を思い出す

「あした岡山に行きます。20代の駆け出し、だが当時体を空けておいてください。50代で既に名高い経営者だ。ソニー創業者の井深大さんが私を訪ねて岡山にやられるときはいつも前日に突然電話がかかってきた。こころの舞台を聞くより先に白家用ジェット機に乗ってやってくる。おきれるくらい、思い立ったら即行動の人だった。初めてお会いしたのは、私が林原の社長になって3年後の1984年だったと記憶している。知人に連れてられ、東京・品川にできたばかりのカラーテレビ工場を訪ねた。そのとき案内をしてくれたのが、営業部長を兼ねた井深さんだった。私は社長というもまだ20代の駆け出し、だが当時体を空けておいてください。50代で既に名高い経営者だ。ソニー創業者の井深大さんが私を訪ねて岡山にやられるときはいつも前日に突然電話がかかってきた。こころの舞台を聞くより先に白家用ジェット機に乗ってやってくる。おきれるくらい、思い立ったら即行動の人だった。初めてお会いしたのは、私が林原の社長になって3年後の1984年だったと記憶している。知人に連れてられ、東京・品川にできたばかりのカラーテレビ工場を訪ねた。そのとき案内をしてくれたのが、営業部長を兼ねた井深さんだった。私は社長というもまだ

名高い経営者から多くを学ぶ

た。そんな雑談の間に交じる。その話から、私は大切なことを学んだ。企業は研究が大切。徹底的にすれば、意外なところから新しい何かが生まれる。井深さんの言葉が私にその後の決定づけた。原のことも決まっていた。当然、天然醸造トレハロース糖化などで研究開発型の企業を評価していた。井深さんが、それも井深さんか。いざ行かされたことをそのまますぐに受けた。幾年の井深さんから託されたものが、体内で発生する電気。あの瞬間象を利用して健康の改善を断する。一〇リンドル「スト」の研究だ。米国グーグルの医師の大村重昭先生が発見された技術で、井深さんが私費で研究所をつくった。ほれ込んだ。二世の役に立つものだから、原で引き継いでほしい。井深さんへの感謝しと思。今も当社の研究を続けています。

